

「恋愛からビジネスまで！映画に見る交渉術」

アメリカ映画を楽しみながら交渉のヒントを探る「映画に見る交渉術」のコーナーようこそ！

いまや国民的行事とも呼ぶべきバレンタインデー。そこで、今回のテーマは「グッとくる愛の言葉」。

ビートルズの歌詩にあるように、“I love you I love you I love you~（愛してるんだ！）”と熱い気持ちを表現するのもいいですが、熱にでも浮かされていなければ、なかなか言えません。どちらかといえば若年層向きの表現です。もうちょっと落ち着いた大人向きの言葉はないだろうか、と考えていたらぴったりの映画を思い出しました。

その名も『恋愛小説家』（原題：As Good As It Gets）。まずはセリフからどうぞ。

“You make me want to be a better man.”

「君のおかげで、いい人間になりたくなった」(ユドール)

“That’s maybe the best compliment of my life.”

「たぶん私の人生で一番のほめ言葉よ」(キャロル)

・・・『恋愛小説家』1998年日本公開

メルヴィン・ユドール（ジャック・ニコルソン）は恋愛小説が得意の有名作家。

しかし、この男、実際の生活では石けんまでも使い捨て、ドアを閉めたらきっかり5回施錠を確認するほど神経質で、人に会えば相手の心をえぐる毒舌を吐き、気に入らなければ他人の犬もダスト・シュートに放り込むなど、極めて自己中心的に毎日を過ごしています。そんなユドール氏が恋に落ちました。相手はマンハッタンでカフェに勤めるウエイトレス、キャロル・コネリー（ヘレン・ハント）。カフェに通いつめ、紆余曲折の末やっとキャロルとデートに出かけたユドール氏の口から出た言葉がこのセリフでした。



「君のおかげで、いい人間になりたくなった」～過不足ないストレートかつ自然な愛の言葉、さすが恋愛小説家と言いたいところですが、実はこのセリフ、失言の償いに「何かほめ言葉を言って」とキャロルに迫られて言ったものです。しかし、気取らないそのほめ言葉は、キャロルの存在をまるごと肯定していました。これこそまさに「グッとくる愛の言葉」です。

人はみな、心のどこかでありのままの自分を受け止めてほしいと思っており、自分の存在を認めてくれた人に好意を寄せないわけがないのです。こうしてユドール氏は思いがけずキャロルの心をつかんだのですが、再び大失言をしてしまい……。続きは、ぜひ映画でお楽しみください。

ここで英語の説明を少し。ユドール氏のセリフにある make は、「～を作る」という意味ではなく、使役動詞で「～させる」という意味です。また、compliment は「お世辞」と訳されることが多いのですが、「心にもないお世辞」ではなく、よい意味での「ほめ言葉」ですのでご注意ください。

さて、ユドール氏のセリフがキャロルの心をつかえた理由がもう一つあります。それは、ユドール氏が普段から素直に心情を吐露しない人物だということ。意外な人が意外なことを言うと言語に残るものですね。